

平成 21 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520004

研究課題名（和文）感覚・知覚・概念 知覚の「生態学的現象学」の可能性

研究課題名（英文）Sensation・Perception・Conception the possibility of “ecological phenomenology” of perception

研究代表者

氏名 村田 純一（MURATA JUNICHI）

所属機関・所属部局名・職名 東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号 40134407

研究成果の概要：

現代の知覚をめぐる哲学と心理学、認知科学の中では、コンピュータ・モデルに基づく記号計算論的、内在主義的な見方に代わって、環境との相互作用や身体の役割を強調するさまざまな見方が提案されつつある。生態学的アプローチやエナクティブ・アプローチと呼ばれる見方がその代表である。この研究では、生態学的アプローチと現象学の見方の組み合わせから成立する「生態学的現象学」と呼びうる見方の意義と可能性を、色彩知覚、知覚と行為の関係、錯覚現象の解明などに焦点を当てて明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論

1. 研究開始当初の背景

現代の知覚をめぐる哲学と心理学ならびに認知科学では、オーソドックスな認知的見方が長い間支配的位置を占めてきた。この見方の中では、知覚的認知は、入力から始まり、出力へと至る一次元的系列過程の中に位置づけられる。そのために、モデルとして経験と整合的でない点があるという困難のみならず、多くの哲学的・原理的問題を抱えることになる。そのためもあり、最近では、この見方にかわって、主体と環境との相互作用や、

知覚と行為の密接な連関、さらには、主体の身体性の重視などを基調とする新たな見方が提出されてきた。エナクティブ・アプローチ、生態学的アプローチ、ダイナミック（力学的）アプローチなどがその代表である。本研究の代表者はこうした状況の下で、生態学的アプローチの重要性を早くから主張してきたが、同時にその見方を現象学的観点と結びつける必要性を強調してきた。そして、この生態学と現象学を結びつけた新たな「生態学的現象学」という見方を具体化し、その意

義を明らかにするために、代表者は、意識をめぐる問題、色彩知覚をめぐる問題などを取り上げて論じてきた。

最近では、知覚的あらわれ方の特性や知覚と概念の関係など、知覚をめぐる新たな議論が盛んになり、また、エナクティブ・アプローチを採用する心理学者や認知科学者から新たに多くの研究成果が提出されるようになってきた。そのため、生態学的現象学の意義を明らかにするには、こうした新たな状況の下で生まれたさまざまな知見を考慮し、生態学的現象学を他の多様なアプローチと対話させることが必要となってきた。こうした背景のもとで、本研究では、生態学的アプローチの代表的研究者である染谷昌義・高千穂大学準教授（分担者）とともに、色彩哲学の専門家や、認知科学の専門家と対話する機会を設けて、生態学的現象学の可能性を探ることを試みた。

2. 研究の目的

(1) 新たな認知的見方の提案：オーソドックスな見方に代わる様々な見方は、それぞれ固有の起源をもっているために、必ずしも他のアプローチと十分意義ある対話を行うことができない状況が続いてきた。たとえば、エナクティブ・アプローチでは、提唱者の一人F・ヴァレラがオートポイエシスという考え方を背景としていることもあり、「自己組織化」の理解をめぐる他のアプローチとの交流に際して困難を抱えることになった。

他方で、生態学と現象学を結び付ける「生態学的現象学」の試みは最初から、両者の方法論の意義と限界についての哲学的考察を中心としているために、方法論的問題を議論する準備ができていた。こうした点で、生態学的現象学という「立場」をもとに他の新たな見方と生産的対話を行うことは、オーソドックスなアプローチに代わる新たな認知的見方へのより具体的な展望を開くうえで、大きな意義があると考えられる。

(2) 現象学の活性化：フッサール、ハイデガー、メルロポンティなど現象学の代表者はそれぞれ知覚の哲学を中心に据えた独創的な見方を提案した。その際、それぞれの仕方ではあったが、経験的心理学などの知見との対決を行った。特にゲシュタルト心理学を批判的に、そして詳細に分析して自らの思索に取り込んだメルロポンティがその代表である。また、フッサールの影響を大きく受けた現象学的心理学者のD・カツツは色知覚や触覚に関する経験的調査や「実験」に基づいて独自の色彩や触覚の現象学を展開した。

しかし、こうした論者の中には、知覚現象を主題にした具体的な経験的分析を考慮した現象学の仕事はほとんど見られなくなっ

た。

知覚に関する現象学的分析がもたらした知見のなかでもっとも大きな功績のひとつは、感覚を知覚的認知の前段階のように見なす見方（知覚に関するオーソドックスな見方に典型的に現れている見方）から感覚概念を解放し、独自の次元を形成することを明らかにした点にある。たとえば、メルロポンティやレヴィナスは、色彩知覚には、対象の性質としての色彩の認知という契機に加えて、色彩を「生きる」という契機が備わっていること、そして、この契機が、身体的活動と不可分な関係にあることを示した。また、D・カツツは、表面色、面色、空間色といった色彩の現れ方のモードの違いを取り出して、それらが「視覚的運動感覚」と相関関係にあることを示し、色彩を「生きる」という次元と対象認知との連関を明らかにした。

こうした現象学の知見の意義を再評価することは、現代において新たに知覚の哲学を再構築する上で不可欠の課題である。というのも、たとえば、分析哲学系の議論のなかでは、こうした知見が見逃されているために、感覚質、ないし、「クオリア」と呼ばれる意識の特質にかかわる議論が活発になされているのも関わらず、それらのほとんどの議論はまったく抽象的なレベルにとどまっており、そのために論理的な困難を抱えざるをえなくなるからである。また、本研究のように生態学的アプローチをとる場合でも、こうした感覚的契機に備わる多様性を視野に入れない限り、知覚者の生きている「世界内存在」の全体像を明らかにすることはできない。本研究はこうした多様な「世界内存在」に対応するあり方としての知覚経験を主題とするものである。

(3) 哲学と認知科学との対話：生態学的現象学という見方は、以上述べてきたように、現象学にしても生態学的アプローチにしても、それらの「立場」を固定化して、閉じた見方に固執しようとする立場ではない。むしろ多様な見方との対話を可能にする開かれた立場をとるものである。このことを実際に実現することは容易ではないが、本研究では国際的なワークショップを企画して、形式的、表面的ではない仕方で集中的かつ実質的な議論が可能になる場を設けるようにした。

3. 研究の方法

本研究の特徴はできるだけ幅広い多様な方法との対話・議論を通して「生態学的現象学」の意義と可能性を確認することにある。そのために、国際的な現象学者との会議、認知科学者や脳科学者との共同研究、分析哲学系の色彩哲学の研究者との研究交流などを

行ってきた。

具体的には、2006年の9月に東京で開かれた「東アジア現象学会議(PEACE)」で代表者と分担者が発表した。2007年には、アメリカ、カリフォルニア、サンディエゴ大学の Jonathan Cohen 教授を招待して、色彩の哲学に関する連続セミナーを開いて研究交流を行った。コーエン教授は色彩に関する「関係説」の提唱者である。そのためにこの講演会は、類似した視点をとりながら、根本的なところで異なった見方となっている「関係説」と「生態学的現象学」を対比する大変良い機会となった。また、本研究の最後の時期となった2009年3月には、同じ総合文化研究科の複雑系理論の研究者、池上高志教授と共に、Philosophy of Perception: Being in the World と題した3日間のワークショップを主催した。この会には、池上教授ほか、染谷昌義・高千穂大学準教授、河野哲也・立教大学教授、総合文化研究科の博士課程の大学院生の小口峰樹氏、谷淳・理研主任研究員といった日本側のメンバーにくわえ、イギリス、サセックス大学 Ezequiel Di Paolo 教授、オーストラリア、グリフィス大学の Jondi Keane 教授ら、合計14名に及ぶ会議であった。専門も、哲学、認知科学、人工生命研究、複雑系理論、ロボット設計、美術理論など多様な分野に関係する研究者が知覚に関して徹底的に議論することができた。特に、エナクティブ・アプローチと生態学的現象学との類似点と相違点が浮き彫りになった点でも、大変有意義な機会であった。

4. 研究成果

多様な研究成果(詳しくは発表論文のリストをご覧ください)のなかから、ここでは2点に限って報告しておきたい。

(1) 知覚と行為: 視覚二重システム理論と現象学

脳科学者のミルナーとグッデールは、視覚的認知がしばしば常識的に考えられているように、感覚入力 処理(認知)過程 行動出力、という具合に一次元的系列のみでなされているわけではないことを脳損傷の患者の事例や様々な実験例をもとにして示した。彼らの理論によると、行動を導く視覚と認知判断を可能にする視覚とは独立に成立しており、それぞれ脳内で別々の経路によって担われている。「行動のための視覚」は視覚野のV1から出発して脳の上側に進み背側経路を通過して後頭頂葉へ至る経路によって実現される。「認知のために視覚」は同じくV1から出発しながら脳を下方へ進み腹側経路を通過して下側頭葉に至る経路によって実現される。しかも両者は独立して実現しうるために、脳損傷の患者には、行動のための視覚は備わっているが、認知のための視覚は欠落し

ているものがある。つまり、意識的には見えていないように思われるが、行動には支障がない、というケース(視覚失認)である。他方で、逆に、視覚的認知はできるがそれに基づいて行動を行うことはできないケース(視覚失調)も知られている。つまり、見えるけれど行動できないというケースである。

以上のような症例とその分析は大変印象深いものであり、それらは伝統的な知覚と行為に関する見方が根本的に変更されねばならないことを明瞭に示している。しかし他方で、ミルナーとグッデールはこうした研究成果に基づいて、わたしたちの正常な知覚に関してもある見方を提出している。それによると意識的視覚は運動とは独立になされる対象の表象形成過程と見なされ、運動との結びつきは間接的だと解釈される。

しかしながら、こうした見方は病的症例をもとにしたたり、あるいは、一定の制限下での実験結果をもとにしたたりして得られた結果を、無条件に普遍化できると考えている点で問題を含んでいる。その上、普遍化する際には、認知は対象の表象であるという見方、原理的にはデカルトの二元論といってもいいような身体と精神分離した見方を前提とした上で推論がなされている。さらにはしばしば、そうした議論に基づいて、視覚経験には身体運動とは独立に可能な場合があり、ここから、クオリアの視覚意識は身体運動とは独立だ、という主張がなされたりする。

しかしながらこのような議論は、フッサールやハイデガーらの現象学が見出した成果を見逃すことから生じたものである。現象学の成果に基づくなら、たしかに視覚意識には、知覚を主眼にした場合と行為を主眼にした場合があるにしても、それぞれの場合で、「探究活動」としての身体活動と「実践活動」としての身体活動が成立していると考えることができる。しかもそうした身体活動に関する区分は生態心理学的研究によっても支持されている。

以上のように考えることができるのなら、生態学的現象学は脳科学の成果から多くの刺激を受けることができるが、しかし同時に、脳科学のほうも、生態学的現象学の成果を参考にして自らの研究の意味を検討する必要が出てくると考えられる。

(2) 視覚に関する媒体説と接触説

アリストテレスの知覚論: 媒体説の始まり:

アリストテレスは当時のギリシャの自然学者が知覚の成立を対象と眼との何らかの物的な接触によって説明したのに対して、むしろ、接触によっては物は見えなくなるのであり、対象と眼の間に距離が生まれることが必要であること、そしてその距離を作る媒質

の働きが不可欠であることを強調した。さらに、この媒質は、対象から質料と形相を切り離し、形相のみが知覚者に受け取られることを可能にする働きをするものと解釈された。

メルロポンティ、ギブソン、H・ヨナス：媒体説の展開：

近代になると、デカルトらによる新たな自然観が登場し、アリストテレス的な知覚論の見方はもっぱら接触説に取って代わられることになる。ニュートンの光学、そして現代の生理学や心理学でも基本的には接触説に基づいて知覚の成立が説明される。しかし、現代では、現象学や生態学的観点の中から、知覚経験に即した見方として新たな仕方媒体説が再登場するようになった。

メルロポンティは「眼と精神」のなかで、画家の実践を手掛かりにしながら、デカルトの見方を批判して、「見ることは対象を離れて持つことだ」という主張を展開した。D・カッツは同じく、色覚にとっての照明の役割を強調して、やはり媒質の持つ意義を強調した。生態学者のギブソンもまた光源から直接発する放射光と対象からの反射によって媒質のなかで構造化されて存在する包囲光との区別をもとに、照明光に焦点を当てた「生態学的光学」を試みた。また、H・ヨナスは対象からの距離化によって「形相」が「質量」から分離するというアリストテレスの考えを解釈しなおして、知覚における最初の抽象化、ないし概念化の契機をこの媒質による働きに見出している。

しかも、媒質はそこに光が満ちることによって対象の知覚を可能にすると同時に、生物がその中を動き回ることのできる空間を構成もしている。この点で、媒質は、知覚と運動の結節点を形成するといえる。ヨナスによると、知覚はこの意味で、生命が最初の自由という形式を獲得する経験のあり方なのである。また、知覚はそこではじめて抽象化が始まるという点からみると、思考の原始的形態ということもできる。

ヨナスは、生命が運動を獲得し、知覚が可能となり、さらには思考を獲得することで意識的自由へと進む過程に、生命から人間への「飛躍を介した連続過程」を見てとろうとしている。

以上のように考えることができる。生態学的現象学は感覚・知覚・概念という人間の基本的な認知と経験の能力に関して、媒体説という見方の再検討を通して、新たな生命と人間の統一の見方を提出する可能性をはらんでいるといえることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

染谷昌義、「ダーウィンの心理学 わかりやすさに逆らう」、『生物の科学 遺伝』、NTS、vol. 62, no.5, 45-49 頁、2008 年、査読無

SOMEYA Masayoshi, "Consequences of ecological approach to perceptual error," in Sara Cummins Sebree, Michael A. Riley, & Kevin Shockley (eds.), *Studies in Perception and Action IX*, Lawrence Erlbaum Associates, pp.176-179, 2007, 査読有

SOMEYA Masayoshi, "What does the ecological approach imply for the phenomenology of perception," *Proceedings of the 1st BESETO Graduate Conference of Philosophy*, pp. 19-30, 2007, 査読無

染谷昌義、「究極のプライバシーが脅かされる!? ニューロイメージング技術とプライバシー問題」『UTCP 研究論集』第 8 号、17-35 頁、2007 年、査読有

MURATA, Junichi, "Space and color, Toward an Ecological Phenomenology", *Continental Philosophy Review*, Vol. 38, 1-17, 2006. 査読有

SOMEYA Masayoshi, "Ecological Turn in Phenomenology of Perception," *Proceedings of the 2nd International Conference of Phenomenology for East Asian Circle*, pp. 16-26, 2006, 査読無

染谷昌義、「エコロジカルな行為論 生態学的観点から見た行為と意図性」、『UTCP 研究論集』第 7 号、61-77 頁、2006 年、査読有

[学会発表](計 9 件)

MURATA, Junichi, "Phenomenology of Illumination, The Ontology of Vision in Merleau Ponty's *Eye and Mind*", OPO 3 Meeting(International conference of phenomenology), Chinese University of Hong Kong, 2008.12.

染谷昌義、「アフォーダンスのリアリティ」CATKAT 研究会招待講演者として口頭発表、2007 年 10 月 20 日、東京大学本郷校舎

SOMEYA Masayoshi, "Consequences of ecological approach to perceptual error," (Poster presentation) at 14th International Conference on Perception

and Action, 2007, July 2nd-3rd, at Yokohama Aka Renga Soko.

SOMEYA Masayoshi, "Affordance does not ontologically depend on animals (it's the other way around): Edward Reed's resource theory of affordances," at 14th International Conference on Perception and Action, 1st symposium entitled "The continuing influence of Ed Reed," 2007, July 2nd, at Yokohama Aka Renga Soko.

染谷昌義、「知覚を認識論の軛から解放せよ エコロジストが周囲環境にこだわる理由」, 第6回フッサール研究会シンポジウム「境界線上の現象学」, 2007年3月17日、関西大学飛鳥文化研究所

SOMEYA Masayoshi, "What does the ecological approach imply for the phenomenology of perception," The 1st BESETO Graduate Conference of Philosophy, 2007, February 3rd, at Seoul National University in Seoul.

染谷昌義、「エコロジカル・アプローチへの哲学者の疑問」, 国際生態心理学会主催知覚と行為の国際会議予行シンポジウム、2006年11月30日、横浜赤レンガ倉庫

MURATA, Junichi, "Perception and action---unity and disunity of our perceptual experience." The 2nd International Conference of Phenomenology for East Asian Circle(PEACE), What is experience?—Perception, Science, and Life-World, 2006, September 22nd, at National Olympics Memorial Youth Center in Tokyo.

SOMEYA Masayoshi, "Ecological Turn in Phenomenology of Perception," The 2nd International Conference of Phenomenology for East Asian Circle(PEACE), What is experience?—Perception, Science, and Life-World, 2006, September 22nd, at National Olympics Memorial Youth Center in Tokyo.

[図書](計 10 件)

村田純一、「心身問題の現在」, 『岩波講座、哲学』第5巻、岩波書店、1-18頁、2008年

村田純一、「ブレンターノ」, 『哲学の歴史』10巻、野家啓一編集、中央公論新社、55-99頁、2008年

村田純一、「知覚と行為—現象学と脳科学」, 『脳科学と哲学の出会い: 脳・生命・心』中山剛史・坂上雅道編著、玉川大学出版会、84-100頁、2008年

染谷昌義、「心/脳の哲学の未来—生態学的観点から」, 『岩波講座 哲学』第5巻、岩波書店、196-232頁、2008年

染谷昌義、小口峰樹、「『究極のプライバシー』が脅かされる!? マインド・リーディング技術とプライバシー問題」, 信原幸弘・原塑編著『脳神経倫理学の展望』、勁草書房、101-126頁、2008年

染谷昌義、「生態学的アプローチの戦略」, 河野哲也・染谷昌義・齋藤暢人編著『環境のオントロジー』春秋社、29-66頁、2008年

染谷昌義、「行動資源の配置—財貨の生態学と人々の生活学」, 柳澤田実編『ディスポジション 配置としての世界』、現代企画室、85-109頁、2008年

村田純一、「『わたし』を探検する」, 岩波書店、1-150頁、2007年

MURATA, Junichi, *Perception, Technology, and Life-Worlds*, UTCP Collection, pp. 1-225, 2007.

染谷昌義、「『認識』の哲学から『環境』の哲学へ」, 佐々木正人編『シリーズ ヒトの科学 第四巻 包まれるヒト』、岩波書店、77-102頁、2007年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田純一 (MURATA JUNICHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
40134407

(2) 研究分担者

染谷昌義 (SOMEYA MASAYOSHI)
高千穂大学・人間科学部・准教授
60422367

(3) 連携研究者

なし